底本　岸本本
校異　綿屋本

花供養

（表紙　題簽）

（表紙見返し）

夫、南無庵の居たるや、座左
には鳧水の流ありて、春は霞
をひたし、座右には東山の景
ありて、満花園にかんばし。
実や何国の春もおしなべて、或は
東野に唫行し、或は西郊に詠
歩す。そが中にも此庵の風雅を
したひ、千里を遠しとせずし

（序一オ）

て笠をかうぶり、草鞋をしめて
来る人々のいやましつゝ、ことしも
すでに花供養なれり。小子も
厥末列に連りて、ともに厥雅
調の下響を楽しむ。まことに
祖翁の恩沢浩ならずやと、稽首して白。
文化紀元甲子春　執古堂葦笠

たくさんにはやくもみゆる桜哉　武陵
やけ野の岸をこゆる朝水　蒼虬
燕の巣もおとさずに家ひきて　鵞少
ひとり／＼に蓑をあてがふ　阿年
やう／＼と百にそろえる木の葉鰈　芦涯
船出す日なき暮の薄月　玉屑
茶の湯者の庭に小萩の散かゝり　其成
足袋きうくつにうそ寒き也　月峰

（一オ）

千住から糟壁までの一縄手　在貫
　虹のきゆるもしらぬへら鷺　馬印
柴の戸も藺を刈ころはねむたくて　葦笠
　さむらひの子のもの読をする　荷屋
朔日のすくなき酒を打こぼし　玉洋
　百万遍の屋根におく霜　玉藻
梟の啼にも君をうらみつゝ　八仙
　扇こがして明るたきもの　五鹿
あさがほの咲まで月のちら／＼と　白黛

露にかたぶく実方の宮　漢水
いはけなく地をはひありく秋の蝶　其白
牛追ふ声に夢はさめぬる　孤石
曙の川瀬に花をせきとめて　斗雪
春とてかすむ宝輪のかね　岱李
からかさをたゝめば蟻の身にこぼれ　驪彭
人のあづけるむしろ四五枚　宋也
折／＼は哀のおほき関守りて　千代道
かたわに咲る霜のなでしこ　有人

（二オ）

をし鳥の腹するほどの雨流れ　国雄
遊行の輿をしばしすえたり　布雪
盛かへて来るも粟飯麦のめし　乙道
あとかたもなき頬のはれ物　百麿
最上にてわかれしことをいひ出す　雨鵲
見るたび／＼にちさき御仏　玉桐
草鞋のよきほどしめる月の露　秋守
やせし芒の早う穂に出る　喜鶴
鵯のこそ／＼通ふ藪の中　梅笛

はやくも過る七十の老　百池

右一順

藪中やひと雲ばかり山ざくら　大坂　長斎
一すぢは仙洞様がいかのぼり　〃　文頂
晴天にけしき作りて帰る雁　〃　飛良
かへる雁は月よりも寒げなり　〃　吾雀
雨しげし春のかくるゝ蓑と笠　〃　春思
おくそこのなき風情也桃の花　〃　買風
雁啼て又夕ぐれの余寒かな　兵庫　五調

（三才）

夜の花ふたりほど来て語りけり　丶　桐栖
水うね／＼柳ゆら／＼夜の明る　堺　蘆堂
さし持の樽もまくらや花むしろ　大和五条　土也
虹きえて薄くれなゐや夕ざくら　熊野渡り浦我青
正月といふほどほそき柳かな　河内富田林甫六
一もとの咲とちるとのさくら哉　城南高木　貞雅
夕風や六田へ流す花雪吹　宇治　泰峨
はや露のみえてゆかしや菫草　丶　烏江
雨はれて寒う成たる桜かな　丶　桐岡

花咲やうしろの山も花の山　　丶　馬州
松かさの煙とゞかぬさくらかな　　丶　恕裕

みよしのや桜定むる人はなし　　近江水口　蜃州
山吹を折気になりし小雨かな　　丶平松　亞渓
ちる花にそえてふきとく霞哉　　丶　しう
菜の花やこれもちる日は山桜　　丶日野　素艶
手をうてば魚鳥馴よる桜かな　　丶　松蘿
一枝もわが背のたらぬさくら哉　　丶　齟老

（四才）

山吹や花のうへよりおくり膳　　、八幡　芳之
鶯も地をありく也花の塵　　、　　栢翠
日中の影となりけり木蓮花　　、　　蘭之
灯のもるゝ家をたよりや花もどり　　、走井　烏頂
皇の空やぐるりと花桜　　、三井寺　千影
土器をうつぶせしも花の名残哉　　、大津　蓬皋
花ながら着物おしこむ袋かな　　、　　流霞
柴の戸や明るところに花菫　　、　　宇洋
からかさの上行春の千鳥哉　　、　　五来

夕月に又見てもどる桜かな　堅田　文常
朝／＼や志賀の煙は花のぬし　〃　友鹿
はつ鮒のとばしる水や板畳　〃　籬邑
二三ほうけの跡の椿かな　大溝　蛙石
東風吹や日の影低き麦の原　〃　無禁
道つくる人もある也山ざくら　〃　梧月
水近き所から早き木の芽哉　〃　一居
草の戸に遊ぶころ也帰雁　音羽　田美
うぐひすや小鍋ほしたる藪の前　野田　籠山

（五才）

横たはる枝から梅の咲にけり　、鴨　稲渕
しなかへて雨に見に出る桜かな　、万木　砂文
軒の塵払ふて見るや初ざくら　、途中　木容
又ひとつ寝に来る鳥や山桜　、　和秀
花守の夜は寝られぬと申けり　、　一渓
夕柳朝のけしきにもどりけり　、藁園　凡旧
松のおくなほ春らしき子の日哉　　梅二
春の水木の根／＼にもたれけり　、　麦二
ものゝいろみな春雨と成にけり　、舟木　獅丸

涅槃像古きはものゝめでたけれ　〃　鸞尾
真向へばまばゆき花の山路哉　〃　相川
物音は山のあなたかおぼろ月　〃　鳰人
もの影の動くやう也朧月　〃　湖夕
思ふほどには見つくさぬさくら哉　〃　素人
上賀茂や古きに似たる柳陰　〃　太田　瑳雀
畠から鐘聞てゐる彼岸かな　〃　乙鶴

中／＼に夜をいのちのさくら哉　伊勢前田　居平

（六才）

此山やしばらく花の朝ぼらけ　丶　一之
花の世を烏の告る朝ぼらけ　丶寺方　里朝
あざやかに見ゆれど花の夜にうつる　丶四日市　眠五
見てゐれば動ぬ花はなかりけり　丶津　涼花
わが家を高うながめて朧月　丶　花秀
谷こえて里の梅が香通ひけり　丶女　梅露
仰向に寝て髭ぬくや春の雨　丶一身田　牛一
よく霞む春やことしの松の内　尾張　梅間

（六ウ）

ぽつたりと煤の落けり花の留守　江水
曇りても降ても吹てもさくら哉　樗風
なき人を杖に桜の山路かな　松調
咲花にあかぬこゝろを水の果　五卜
夕影やさくらが丘のぬれ仏　母節
さくら／／山のあるじはあるなるに　路丸
世の中や花のあたりの裸山　浦唄
初花や幾夜の夢の行もどり　輩玉
君が代や／／とて糸桜

相模五栢園連　南謨

（七才）

ちる花やいかにも鈍き下り船　兎夕
花の日や聞はつりたる三井の鐘　文的
いやましの花の雫やふもと川　花調
水底のおぼつかなさよ遅桜　六元
花盛三日の月の足はやし　浦夕
山深し桜咲日の雲のあや　乙芦
花ざかりいつもかはらじ谷の水　川画
花の山扇をひらく人もなし　線水
さくら／＼こゝろに着せん墨衣　岩芦

（七ウ）

山桜いつかの人に逢にけり　文丈
人里は夕告鳥や桜がり　里旭
花の雪ものもたぬこそうれしけれ　芦尺
花曇翹の声の果のなき　正二
咲つくし散つくしても桜々　丈水

漁父もどる浦しづか也夕霞　上毛大原　青蒲
柳陰月の小川にあまりけり　安房江見　松夢
山川に朝日をしたふ小鮎かな　奥南部　梅笑

（八才）

永き日や我に井一田三反　　〃　北溟
朝堇等閑ならぬ日のかゝる　　〃津軽　里川
春の月朔日ごろの夜也けり　　〃　桃仙
さくらさけ十日あまりの宵月夜　　〃　文石
人近く鳥は寝にけり梅月夜　　信濃南原　知足
いたづらに雉子の啼立麓かな　　〃　志耕
春の夜の不二を見あぐる在所哉　　〃上穂　汝蘭
夕ぐれや松と桜の山ふたつ　　〃善光寺　文兆
山の馬は人食ハでよし花の道　　〃　希言

（八ウ）

春雨のことしは早し草の宿　　丶松本　雨暁
菜の花の盛や昼の鐘がなる　　丶　　可考
寝過して降出しも見ず春の雨　　丶上田　半古
うぐひすやよく／＼聞ば苦もなくて　　丶伊奈　梅香
雁行てころりと芦の丸屋哉　　丶飯田　何頼
桟やかけはしや鳥雲に入　　丶　　蕉雨

分入や東雲ごろの花ごゝろ　　越前丸岡甫立
霞の中を馬の啼里　　里晴

（九才）

青畳青き匂ひに春くれて　丹柱
白木づくりのものゝ手軽き　友甫
さば／＼と塒の鳥の月明り　文蘿
五十は旅のおちつきし秋　霞耕
岡崎の祭過行水澄て　素更
朝／＼風をしのぐ椋の木　石渓
藤籠のふぢ引のばす竹柱　江翠
素焼茶碗のおとなしにわれ　度柳
舞扇入道殿へまゐらせん　画風

一時雨づゝくゞる月影　一透
片よせて積たる船の炭俵　素涼
何ぞといへば妹が精進　一吼
陸奥は恋にこゝろのやすき哉　虎角
どこから見てもおなじ山形　雨鶴
遅桜塩たく煙うちかゝり　龍至
眠がちなる春の狩人　筆

時しれぬ山の深さに桜がり　直人

（一〇才）

其花やその梢までむかしぶり　僧　霞耕
けふはなほ黒木の目だつ花盛　石渓
たばこさへ千々の味あり花曇　虎角
一すぢに曇る行へや初桜　江翠
咲桜しばらく雲をはなるゝか　丹柱
蜂の巣はひとつも見えぬ桜哉　一吼
初花や薪つみたる二王門　里晴
曙や月はうしろに花の雲　度柳
人／＼に余る桜のさかり哉　友甫

散方へ巡る桜の日和雲　一透
花見えて朝の浅瀬をわたる哉　文蘿
さく花に人のこゝろのうごく也　素更
人去て花と我との夕かな　素涼
花の人と我も呼れん杖と笠　龍至

山寺や鐘つくうへの春の月　丶角鹿　仙草
三日月や末たのもしき花の春　若狭　千好
梅が香や水音ほそき夜の庵　美作倉鋪　井角

人去て桜にくるゝあらし哉　丶高下　文草
山寺やけさも寝て聞雨の雉子　但馬舟谷　五含
みなもとを見れば梅あり野辺の水　丶豊岡　釣淇
青柳の浦となりけり一在所　丶　鷺橋
烏さへ柳を立ば名残かな　丶　柚蓮
大雨に柳とらるゝ日ぐれ哉　因幡鳥取　大啄
春の水見入て居れば流れけり　丶　桃丘
此花に生れおくれて這子かな　丹波氷上郡　魯縞
散花も見たしちりなば春でなし　丹后日間浦　蘿木

朝かげの垣の戸あさし薺うつ　加賀金沢　犁松

山ざくら巌にあつてさわがしき　〃　棹江

鶯にかわかぬ外山たなぐもり　〃　赫之

畑中の木も花どきは詠あり　〃　一川

猫のこひいくつも鳴て別れけり　〃　五郷

陽炎や草たちばなの古葉より　〃　松斎

つんまりと家十ばかり花のおく　〃　蘭吹

永き日をしきりに雉子の遠音哉　〃　魯章

（一二オ）

白雲の吹定りてみねの花　暮柳舎連　我々
春雨や人ぽつ／＼と紫野　〃　階涼
帰るかと思ふ夜もあり雁の声　〃　素羽
花二木うゑて月みる二夜かな　〃　槐路
とし／〻＼にむかしの日あり花盛　〃　車大
川ひとつあるばかり也雉子の声　槐庵連　友樹
花の塵吹やよし野のつるべ鮓　〃　其如
三井寺ははやく更たり春の月　〃　素朗
二日より一日がよきあか椿　〃　乙彦

おぼろ夜や月に五尺の柳陰　　〃　　秋侯
道守よ垣引おこせうめの花　　雪雄
花の宿ひとりものうし夜のいめ　　高松　　自明
物おとについて鳴なり猫のつま　　能登田鶴浜攻玉
咲花のかたへは瀧の水けぶり　　〃　　文路
水いそぐやうに流るゝ春の風　　〃　　李渓
谷あさき里の朝気や初ざくら　　〃　　几山
山ざくら盛あらそふけしき哉　　〃　　赤斧
ながき日やいづれの鳥と見定ず　　〃　　李之

（一三才）

尋来るふもとの家や山ざくら　〃黒島　加由
吹分る風にいろあるさくら哉　〃　魯石
山かげや手にむすびあふ花の水　〃　玻井
初ざくらこゝろのびたつ日となりぬ　〃曽良　岸芷

酢のきかぬものにも似たり雨の花　越中富山　三枝
　雛の後宴をあそぶ里の子　田禾
ふたつみつ蝶の出て来る垣ゆふて　魯鳥
　ちかきところに山のかねなる　路月

（一三ウ）

つぼ〳〵と月にかさなる石のたけ　二尺

ごそ（ママ）りおとする鹿の寝がへり　馬城

世をすてゝこそ見定れ秋のくれ　としを

小鍋のつるをかけるをり釘　嵐丈

二三日山田へ船をかしてやり　馬印

初夜のかしらにおりる涼風　蒼虬

陽炎となるやわら家の朝けぶり　二尺

鍬つけてむかふところや雉子の声　魯鳥

（一四オ）

戸の先に詠くれたり春の山　俊雄
梅がゝにうかれてはいる戸口哉　可丘
わらたゝく礎となりし春日かな　馬城
咲と見しばかり深山の赤つゝじ　三枝
かぎりなき空にしだるゝ柳かな　路月
暁や柳にかゝるけしきあり　都山
かたかへて行や桜の山つゞき　嵐丈

きら／＼と干あがる海苔の夕日哉　丶　右円

広庭や桜ふまへてみる桜　丶　鼎々
さくら咲て浮世めきたる庵哉　丶　碧山
山の端に鐘は曇りて春くれぬ　丶　玉屑
長岡の里にやどりて藤の花　丶　斗一
わがこゝろうき世まかせの花見哉　丶　我尹
舟曳の柳負行あらし哉　丶　東英
短冊やこゝろの花の咲処　丶　羽扇
雉子はしるかげあらはなり麦畠　丶　路甫
苗しろや早乙女はまだ常の人　丶　石亮

（一五才）

立もどり又みてゆかん遅ざくら　　烏休
思ひきって折た人あり夕桜　　松丘
気のつけばところ／〻＼の桜哉　　羽扇
時守の鞨鼓のおとや夜の花　　窈究
夕ぐれや桜こぼるゝ水の面　　孤山
すこしづゝ嵐もほしき花の上　　周台
花と花中ゆく鳥のあさ雫　　魯山
花からの鳥の音聞てけさの旅　　文景
谷川や魚のうく日を花のかげ　　太翼

（一五ウ）

みよしのにかくれ里あり桃の花　丶小林　沙麦
人声や雨のはなるゝ山ざくら　丶滑川　五湖

蛤の城よりつゞくさくら哉　丶　三丸
　凧のすはりし浦の真昼　沙麦
鶯の声を扇にのせて来て　成美
　素湯沸かへる釜のふたとる　五湖
鮫ほどく若者どもが雨の袖　麦
　鹿にふまるゝ露のくさむら　丸

（一六才）

芋の葉もあだにあかるき夕月夜　湖
　秋とちぎりし人のこゝろは　美

三笠山風吹きれて春の月　越後今町　驪彭
日の出る畠もちけりはるの風　〃　魚国
散花の時／＼ぱつとちりにけり　〃　高田　杜走
背戸門の梅にとゞまれ夕付日　〃　几丈
砂よけや海士が垣根もすみれ草　〃　左琴
どちらへも桜に近し道の石　〃　荒井　如蘭

はしたなく小雨降けり春の月　　〃　　旭浪
雲深くなるより桜散にけり　　〃　梶屋敷　若水
松の戸は松の閑あり花のくれ　　〃　柏崎　平水
花の香やめでたき家の膳まはり　　〃　魚沼郡松茂改　昇魚
桜さくけふより旨し蜆汁　　〃　長岡　大珎
もち山の小松かぞへる子の日哉　　〃　　宇瓊

鶯もひとつ添けり花の山　　播磨明石　桃下
梅津より夜は明初て雉子の声　　〃　　遊亀

（一七オ）

夜もすがら鳥の鳴しはどの桜　　露石
何一木もたでも寝よし春の月　　蝸国
山吹のあはれは花に成にけり　　士龍
人の気ものぼり／＼て花の雨　　里芳
秘が中の秘あり夕の花ざかり　　簀仭
そびへたる岩の桜も咲にけり　　羽白
雉子鳴や明行野末山のすへ　　牛後
夜／＼の雪わするれば初ざくら　　草隠

よしのにて

花ふめば三寸ばかりくぼみけり　　土芝

出女のまたげかへすや春の水　安芸広島　五鹿
椽ぬれし豆腐の水や朧月　〃小方　可友
のどかさや汐さす浜の朝ぼらけ　周防白松　猗竹
草も木もうつり初るや春の水　〃　和道
月の入かたへ帰るか春の雁　〃　春郷
あわ雪の消行庭や猫の恋　〃　古桂
近くみゆる海のおもてや梅花　〃　百之
花咲てしたしき庵と成にけり　長門下関　冬蘿
花のおくゆかしき氷流れけり　〃　万府

（一八オ）

ほこりたつころより人の花み哉　羅風
流れ木の花にまぶるゝよどみ哉　文橋
いろ／＼に花最中の雲霞　五嵐
晦日の夜も有明のさくら哉　晴嵐
ちり初しけふぞまことの花盛　桃里
春の夜のこゝろのあまる戸口哉　玉花
わが門の月夜をみたる二月かな　梧園
こぼれ梅釣瓶の水のきれいなり　文亭

（一八ウ）

露ありとしらで蚕の一期哉　豊前小倉　黙雷
此春もよし野の花のちるといふ　〃　十邑
朝の風桜を出てしづか也　豊后日田　葵亭
咲花の一枝に曇る山路哉　〃　有篁
思ふたる木に咲にけり初桜　〃　南美
百年の老みるさとや遅桜　筑前姪ノ浜　霞梅
ちるゆゑになほも嬉しきさくら哉　〃　魯々
見つゝをれば眼のかゆうなる桜哉　〃直方　一萍
春の来てかさなる花の都かな　筑后久留米　芦月

（一九才）

山ざくら見にゆく人も花ならん　〃　修然
夕月に梅ちる里のこみち哉　〃　美乎
常にさへ夜明はうれし花の春　〃　文角
花咲て海に入日のふとりけり　〃田主丸　其成
雨を得て桜のひとつひらけたり　肥前島原　桃仙
行水にかゝはる春の寒さかな　〃　春喬
万歳のとほりて春の道ひろし　李暁
わが袖に匂ひをうつや花の露　〃諫早　孤石
児桜ことしも花を待にけり　〃　千来

（一九ウ）

水桶に来て鳴宵の蛙かな　詞英
たんぽゝに春風おこる夕かな　〃　春河
五十嵐に桜のひかる夕哉　〃　階渚
晴しかと雨戸明れば花の降　〃　倚鳳
梅が香に暮てほどなきねぶり哉　〃　千波
花の山夜はありながら明にけり　〃　雨仙
春の夜や何して人の暮るなる　〃　詩笛
幾すぢも水流れけり藤の花　〃　文塘
夜をこめて鶯聞に出にけり　〃　長崎季明

（二〇才）

山のはをはなれて月の朧哉　　〃　吾友
鶯のじだらくに鳴夕かな　　仝
咲花のあはひからちる桜哉　　〃　鞍風
在所にはわたし船あり春の雪　　〃　祥禾

桃咲て　甫（ママ）　腥き春辺かな　　〃平戸　井甫
峰の花机の塵となりにけり　　肥后熊本　眠石
暮かねて花にひかるゝ日あし哉　　〃　敝裘
けあげたる鞠のしたゆく乙鳥哉　　〃　薫阿
夕雲の花にわかれてみだれけり　　朝四

ものゝ香の春なつかしき山路哉　碧泉
春雨のそゝぎあげてや小米花　〃　女　木曽
夕日さす鐘しづかなり花の山　〃　天山
三日月のほとりに春の思ひ哉　〃　羽人
さゞ波のはては月夜の桜かな　〃　箕渓改
梅咲て世の中ひろく成にけり　〃　岫丸
いめの間も寝るにはをしき桜哉　壱岐勝本　其冠
物なつく鴎うきけり春の海　〃　夏貢
〃　観月

（二一オ）

春の藻のつら／＼延て湖のいろ　近江堅田　歌雄
御忌のかね人のあいだにひゞきけり　城南寺田　良水

みなと川にて

うは浪もかづくや花の雪ぼうし　在京　居然
葩煎売の出て来る桃のさかり哉　〃　玉桐
花の声となりゆく峰の嵐かな　京　百池
木のはしのはしより梅の匂ひ哉　〃　驢丹
花ちりて又山里となりにけり　〃　亨
春をしと入日みにゆく堤かな　〃　漢水
かけ鯛やこれはあの世のめぐりあひ　あたふ

これなりに春もくるゝかはるの雨　北山　春山
子をもてばもつたこゝろの花み哉　京　乙道
橋守の屋根におもたき柳かな　〃　銀喬
雉子鳴や汐の満干の小松原　〃　千代道
つばくらのはいりおくれて朧月　〃　鳥幽
梢まで水のとゞきし柳かな　〃　湖月
月はとく峰をはなるゝさくら哉　〃　琴斎
在明の朝／＼山のさくらかな　〃　吐成
こまかなる雨のふりこむ桜哉　〃　松丸

しづかさや桜木まじる梅の花　〃　徳野
いそがしき門を出れば柳かな　〃　徳々
水澄とみれば花ちる夕かな　〃　斗九我
ゆふべにも露降山のさくら哉　〃　可暁
春の川夕月白く流れけり　〃　魯雲
どさくさと日のくるゝ也花の宿　〃　半来
花の夜や半ふみこす渡月橋　〃　其白
人も我も花よさくらよ出て行よ　双南
永き日や鳥もゐねぶる松の枝　在江戸　鬼洞

山風や月の外よりちるさくら　京　月峰
九重や先一重なるはつ桜　〃　在貫
あけぼのは水に涼しき桜かな　〃　宋也
鶯や窓の先なる清水寺　〃　古塘
日和山のぼればさくら曇かな　〃　芦涯
海苔汲の袖にもかゝる小雨哉　〃　葦笠
ひと山の桜になるゝ小舟哉　〃　百磨
人はみな桜にいづる山辺哉　〃　国雄
雉子の声木深くなりぬ男山　〃　玉藻

（二三才）

水もらふ家の裏まで桜かな　　布雪
日のくれて並木のみゆる蛙哉　　阿年
尻すゑて暮る花みる山辺哉　　岱李
花供養翁のたまをうかさばや　　其成
梅一重咲なり比良の山おろし　　素頑
春雨のけふも降こむ嵯峨の山　　玉洋
朝／＼は大事に思ふさくら哉　　馬印

こしぢにありて

花鳥や身は笠のひも草鞋のを　　田禾
小寒きはさすがに花のさかり哉　　蒼虬

（二三ウ）

御幸町錦小路上
桃林堂 勝田喜右衛門
京都書林 烏丸下立売上
橘栄堂 勝田善助

（裏表紙見返し）

（裏表紙）